「ここ、いいかな」
「……はい、どうぞ」
読書していた松永ひとりは不意に声をかけられ、集中力を手放した。しかし相手を見てから冷静に答えた。円卓の中心に置いていた本を手元に寄せる、という心遣いすら見せた。声をかけたのは年齢の割にやけに背筋がぴんとのびた老紳士だった。老父はその気遣いに対して黙礼し、冷たい椅子に腰かけた。普段の彼であれば他の席へ座るように鋭く言い放っていたところだった。それを彼は自覚していた。
そこはテラス席である。今朝方まで雲に覆われていた空には青色が見え、日差しが射しこんでいる。テラス席に二人の他に人の姿は無かったが、そうではなくなるのも時間の問題だった。
老紳士は店員がモーニングセットを運んでくるのを待つ間、読書をするという選択をした。年季の入ったしかし手入れがよくされた牛革の手提げ鞄から、帆船の図録を取り出した。装丁は新品とは言い難く正にその通りだったが渋く美しく、老父はそれを認めるとしずかに目を細めた。机上で本を広げてから、最近は目の衰えが激しいことを思い出す。
老紳士が来る以前からそうしていた松永はほんの一瞬だけそちらを見た。老人はゆっくりと老眼鏡を付けていた。目は理知的で、知的好奇心も併せて感じられた。納得を得た松永はすぐに手元の文字列に目を落とした。
声をかけられた時点で、松永は老人を同類だと感じていたようだった。
テラスに通ずる扉が開いた。両者は本を閉じた。双子のように息が合っていた。
プレートを器用に片手ずつに持つスタッフはまったく年の離れた客が同じ机を囲っているのを見て、若干不思議に感じたが、関係性を尋ねるほど雇用者は暇を許されていなかったし、ましてやそれを押してまで関係性を知ろうとは考えもしなかった。
「お待たせいたしました、こちらがモーニングのセットになります。おふたりもクロワッサンですね。野菜ジュースのお客様が――――」
「私だね」と老紳士。
「牛乳が俺です」と松永。
それぞれがそれぞれに提供される。焼きたてのパンの匂いが空腹を刺激した。
「ごゆっくりどうぞ」
雇用者はごく浅く一礼し、店内に戻る。ふたりは行儀よくその様を見届けた。
ふたりが食事をはじめ、無言がその場に馴染み始めた頃。
「中、混んでますね」
おもむろに、どちらかが言った。
「そうですね。こんなに気持ちいのだから、外でゆっくりしたらいいのに」
戸惑いなくそう返された。
当たり障りのない話は欠片も挟まれず、最近気になっている本についてふたりは語った。